

## コンテキストの中のルーン

書評：Terje Spurkland, *Norwegian Runes and Runic Inscriptions*.  
Woodbridge: Boydell & Brewer 2005, ix + 206 p.

小澤 実

### 1. ルーン学の道程と本書の位置

鉄器時代末期から中世に至るスカンディナヴィア世界を特徴付ける要素の一つとして、ルーン文字を挙げることに異論はないだろう<sup>1</sup>。ローマン・アルファベットとは異なる特徴的な 24 文字で構成されるルーン・アルファベットは、その最初の 6 文字をとって通常フサルク (fupark) と呼ばれる。2 世紀頃に出現したと考えられるルーンは、その当初は必ずしもスカンディナヴィアに特有というわけではなく、ローマ期からポストローマ期にかけて広くゲルマン世界に共通する文字であった。大陸やイングランドにおいては、ローマ文明の諸要素が普及する過程で次第にローマン・アルファベットに地位を譲る一方で、スカンディナヴィア世界では、ローマ文明との接触を経験したにもかかわらず、さらにラテン・カトリック圏、ビザンティン・正教圏、イスラーム圏からの刺激を受け続けていたにもかかわらず、ルーンが廃棄されることはなかった<sup>2</sup>。8 世紀に文字数を 16 へと減らす言語システムの根本的な変動を経験しながら、ヴァイキング時代にはスカンディナヴィア世界の殆どの場所で主要文字として、中世を迎えても日常文字としてローマン・アルファベットとの併用が行われた。さらにスウェーデンのゴットランド島では 17 世紀まで、またスカンディナヴィア半島北部のダーラナ地方では 19 世紀末までその使用が確認されている。

ルーンへの関心は中世には既に存在していたが、学知としてのルーン研究すなわちルーン学 (Runologie) は、スカンディナヴィア古世界への探究心が高揚した近世に始まった<sup>3</sup>。その嚆矢

は、スウェーデンのヨーハン・ブーレ (Johan Bure / Johannes Bureus 1568-1652)<sup>4</sup> とデンマークのオーレ・ヴォルム (Ole Worm / Olaus Wormus 1588-1654)<sup>5</sup> である。両者による著書はその記録の正確性ゆえに後続研究の基礎となるが、スカンディナヴィア世界に特有と信じられていたルーンの起源をめぐる言説は、当時ヨーロッパの知識人社会を席卷していた言語起源論と呼応し、更には国家意識の角逐する場へと接続した<sup>6</sup>。16 世紀後半から 17 世紀、つまり過去への憧憬とナショナリズムが緋交ぜとなったゴート・ルネサンスの時代において<sup>7</sup>、当該問題は「ルーンを持つスウェーデンこそプラトンの述べるアトランティスであり、総ての文明はスウェーデンを源とする」と主張するウップサーラ大学教授 O・ルドベック (Olof Rudbeck / Olaus Rudbeckius 1630-1702) による『アトランティカ Atlantica sive Manheim』(1675-98) で頂点に達した<sup>8</sup>。

以上のような興味深い歩みを見せる近世ルーン学は、19 世紀に大きな転換を経験した。ナショナリズムの時代とも言われるこの世紀において、ゲルマン語圏各地で愛郷心を背景としたゲルマン熱が沸騰し、スカンディナヴィアの学者たちは言うまでもなく、W・グリム (W. Grimm 1786-1859) をはじめとするドイツのゲルマン学者もルーンについて語り始めた<sup>9</sup>。学者たちの関心はやはりルーンの起源にあったが、すでに聖書を基準とする編年法と決別し厳密な文献学知と比較言語学知で武装した 19 世紀のルーン学は、ともすれば妄想の域を脱していなかった 17 世紀のそれとは異なる展開を見せた<sup>10</sup>。デンマー人の L・ヴィマー

(Ludvig F. A. Wimmer 1839-1920) による『ルーン文字』(1874) は、19 世紀の学問作法に準拠したはじめてのルーン学手引書であり、これをもって近代ルーン学の礎とする<sup>11</sup>。研究手法の確立にあわせてヴィマーが『デンマークのルーン・モニュメント』(全4巻 1893-1907) を<sup>12</sup>、ノルウェーでは S・ブグゲ (Sophus Bugge 1833-1907) が「宗教改革期に至るノルウェーの刻銘 Norges Indskrifter intil Reformationen」(1891-) を、スウェーデンでは S・セーデルベリ (Sven Söderberg 1849-1901) と E・ブラーテ (Erik Brate 1857-1924) が「スウェーデンのルーン刻銘 Sveriges Runinskrifter」(1901-) を企画することで、各国単位のルーン刻銘集成が実現した。彼らが手をつけた作業は現在もその弟子筋によって継続し、部分的な修正はうけながらも標準校訂版として通用している。

さて、ここでノルウェーにおけるルーン学の状況について少し触れておきたい。カルマル期から 1814 年まではデンマークと、1814 年から 1905 年まではスウェーデンと同君連合という国家体制にあったノルウェーは、デンマークやスウェーデンと異なり、必ずしもナショナリズムと同調したルーン刻銘研究を経験したわけではない。というのも研究の中心となる大学組織がクリスチャニア(現オスロ)に設立されたのが 1811 年と、15 世紀末にはすでに成立していたコペンハーゲンやウップサーラに比べて後発であったことに加え、この両国の学者がノルウェー版図内の刻銘も同時に取り扱っていたからである。転轍機の役割を果たしたのは前述した S・ブグゲである<sup>13</sup>。厳密なエッダ詩校訂版(1867)を公にすることで学者としての地位を確立した彼は、その後「宗教改革期に至るノルウェーの刻銘」の校訂作業に取り掛かった。しかしながら前期ルーンを集成した『前期ルーンに関するノルウェーの刻銘』(全3巻 1891-1924) は彼の生前に完成することではなく、その作業は弟子であった M・オルセン (Magnus Olsen 1878-1963) へと引き継がれた<sup>14</sup>。師から継承した作業を 1924 年に終えたオルセンは、1941 年より『後期ルーンに関するノルウェーの刻銘』(全5巻 1941-60) の公刊を始めた<sup>15</sup>。また彼は、第一線級の学者を動員した「北欧文化 Nordisk Kultur」シリーズ第6巻『ルーン』(1933) の中でノルウ

ェーとその文化的影響圏におけるルーン刻銘の総覧を<sup>16</sup>、「イギリスとアイルランドにおけるヴァイキングの古遺物」シリーズ第6巻(1954)においては「イギリス、アイルランド、マン島におけるルーン刻銘」を担当することで<sup>17</sup>、ノルウェーにおけるルーン学に堅固な基盤を築いた。

しかしながらヴァイキング時代以前が中心であったノルウェーのルーン刻銘研究は、1956 年に急旋回した。同市ブリッゲン地区で 1955 年に起こった火災の処理を契機として土中から発見された木片の表面に、ルーン文字が記されていたからである。中世盛期に遡るこの木簡群は、古代ブリテンにおけるウィンドランダ資料群、カイロのゲニーザ文書、ノヴゴロドの白樺文書と同様に、中世ノルウェー人の生活を伝える貴重な資料であることが判った<sup>18</sup>。発掘作業を監修した A・リーストルは、5 巻で完結した『後期ルーンに関するノルウェーの刻銘』に続刊を設けることに決定し、1980 年よりブリッゲンから出土した商業書簡を中心とした第6巻が刊行され始めた<sup>19</sup>。その後オスロ、トロンハイム、テンスベリでも中世ルーン刻銘が発見され、現在では中世ルーンもノルウェー・ルーン学の柱となっている<sup>20</sup>。

最後に近年のルーン学の動向について触れておきたい。20 世紀以降各国単位で進められていたルーン刻銘研究は、1980 年頃より一つに集束しつつある。1980 年、アメリカのミシガン大学で第1回「ルーン並びにルーン刻銘シンポジウム」が開催され、世界のルーン学者が一堂に会した<sup>21</sup>。5 年ごとに開かれるこのシンポジウムでは、言語学、歴史学、美術史学、宗教史学等を専攻する研究者が活発な討論を行い、その記録を出版している<sup>22</sup>。また、オスロ大学附属文化博物館では 1986 年以降『ルーン新報 *Nytt om runer*』を毎年発刊し、ルーン刻銘に関する発掘情報と文献目録を提供する一方、ウップサーラ大学北欧学科では 1987 年にルーン研究の叢書を創刊し<sup>23</sup>、L・ペターセンを中心としてキーワード検索が可能なルーン刻銘のデータベース化も進めている<sup>24</sup>。

1948 年生まれの著者の T・スパークランドはオスロ大学で言語学を修め、93 年にベルゲンのブリッゲンで出土したルーン文字の刻印された木簡

群の言語学的分析により博士号を取得した<sup>25</sup>。1978年以降オスロ大学とイェテボリ大学で研究と教育に従事し、96年からはオスロ大学付属ヴァイキング・中世研究センターの助教授職にある。現在彼は、ヨーロッパ各国の研究者と協力しながら、ヴァイキング時代から中世にかけてのノルウェーにおける文筆文化と口承文化の接点を探るプロジェクトに従事している。

本書は、現在のノルウェー領域内に残るルーン刻銘を包括的に紹介した英語による初めての入門書である。2000年にノルウェー語で原著が公刊されたが、それ以降に刊行された研究文献等も追加されたことにより本書は実質上の改訂第2版となる<sup>26</sup>。これまでデンマークのルーンに関してはE・モルトケ(1985)が<sup>27</sup>、スウェーデンに関してはS・ヤンソンによる基本書(1987)が英訳されているので<sup>28</sup>、本書によりスカンディナヴィア三国のルーン刻銘の概要を英語ですべて知ることができるようになった。こうした英訳への要請は、すでに述べたようにルーン刻銘への関心が国際的な規模となり、さまざまな分野による学際研究やスカンディナヴィア内だけではなく北ヨーロッパ全域に広がる地域間比較研究が盛んになってきたことがその一因であろう。また、著者が籍を置くオスロ大学の「ヴァイキング・中世センター」では近年英語による学位取得も可能となっており、講義の教科書としての役割も果たしていると考えられる。

## 2. 本書の梗概

本書は導入部と8章からなるが、内容のまとまりを考えると大きく4部に分割することが可能である。すなわち、ゲルマン世界におけるルーンの出現を論じた導入から第2章まで、24文字からなる前期ルーン(the elder fupark)の登場からそのノルウェーにおける展開を対象とした第3章と第4章、16文字へ減少する後期ルーン(the younger fupark)の出現からその隆盛期であるヴァイキング時代を対象とした第5章と第6章、中世世界への移行期からベルゲン出土木簡を中心とする中世ルーンの諸相を論じた第7章と第8章である。仮にそれぞれを第1部、第2部、第3部、

第4部として内容に立ち入ってみたい。

第1部は、序論「最初のフサルク」(1-2頁)、第1章「ルーンの起源：誰が、何を、いつ、どこで」(3-4頁)、第2章「最古のルーン・アルファベット」(5-19頁)からなり、第2部以降の展開の理解に必要な基礎知識を与える。序章では、1903年にゴットランド島ストーンガ教区のキュルヴェル農場で発見された、105×75センチメートルの石灰石片について論じる。西暦400年ごろのものと推測されるこの石片は、考古学者によれば石棺の一面であり、そこには二列のルーン文字列が刻まれている。一見すると意味不明瞭なこのテキストが刻まれた理由を考えるためには、このルーン文字列が利用された当時の社会というコンテキストを考える必要があることを著者は示唆する。第1章では、ルーンの起源という過去多くのルーン学者を没頭させたテーマについて触れている<sup>29</sup>。しかしながら本章に割かれたページ数が端的に示すように、筆者はこのテーマについて旧説を簡潔に整理するにとどめ深入りはしない。ただ、紀元1世紀頃よりローマ世界との接触が頻繁となったゲルマン社会においても行政システムや経済構造が根本的な変動を経験し、コミュニケーション手段である文字システムが必要とされたことが契機である、と指摘する点は注目に値する<sup>30</sup>。第2章では、24文字の前期ルーン成立にはローマン・アルファベットの影響が大きい可能性を指摘し、それらには確かにある程度の宗教心性の反映を見ることはできるが、必ずしも素人世界で信じられているような「魔術的」意味の封じ込まれた文字群ではないと論じる<sup>31</sup>。

第2部は、第3章「前期フサルクによるルーン刻銘」(20-53頁)、第4章「エッギヤ石碑：流血儀礼かノルウェー初の転覆船報告か」(54-71頁)からなる<sup>32</sup>。第3章では、多様な支持体に刻銘されたルーンを取り上げ、スカンディナヴィア世界において前期ルーンが利用された種々の状況を復元する。前半では1734年南ユラン・ガッレフスで発見された黄金の角笛、1965年ノルウェー南西部ヤーレンのアイケランド農場で発見されたブローチ、1817年スウェーデン・ブレキング地方カールスクローナのテュルケーで発見されたブラクテアット、1908年ノルウェー・南トレン德拉

グ・ヒトラ島のストローム農場で発見された石棒を取り上げ、それぞれの支持体に記されたルーンの意味を、第1部で強調されたコンテキスト再現という手法を用いて推量する。後半では初期ルーン石碑、とりわけノルウェーのエストフォルで発見されたチューネ石碑を取り上げ、その社会的機能に迫る。文献史料の特に貧しい時代のためコンテキストの再現には後世の叙述史料を用いざるをえないが、石碑がもつ法的効力の可能性を示唆する点は興味深い。第4章では、1917年にノルウェー・ソグン県ソグンのエッグヤ農場で発見された著名な石碑を題材に、テキストとコンテキストの間を往還するルーン学の現場を再現する。筆者は、神話学やスカルド詩研究の知識に基づいてテキストの意味を確定しようとするM・オルセンの「外的解釈」と、厳密な文献学的解釈によるL・ヤコブセンの「内的解釈」の論点を丁寧にまとめ、近年当該テキストに対して積極的な発言を続けるO・グレンヴィクの新解釈を紹介する<sup>33</sup>。彼によれば、エッグヤ石碑の文字列はオルセンが提示したような宗教儀礼に関する内容ではなく、より具体的な沈船の記録である。筆者はこれと関連して、エッグヤ石碑の成立年代についての論争にも触れる。考古学者や美術史学者の説に従えば、エッグヤ石碑は650年から700年となるが、歴史言語学者による言語学的解釈に従えば、エッグヤ石碑のルーンは「原北欧語 proto-Scandinavian」から「初期古ノルド語 early Old Norse」へと移行する「語中音消失期 age of syncope」、つまりおよそ900年前後となる。仮に前者の説が正しいとするならば、ノルウェー語史もノルウェー船舶史も大幅な書き換えが必要となることを指摘する。

第3部は、第5章「新しい言語、新しいアルファベット」(72-85頁)と第6章「ヴァイキング時代のルーン刻銘」(86-130頁)からなる。第5章では、デンマーク・リーベで発見された人間の頭骨に刻まれたルーンやシェラン島のイエアレウ石碑を題材にとりながら、8世紀に24文字の前期ルーンが16文字の後期ルーンへ移行する理由を、文字と音韻の関係から探る。決定的な解答が提出されているわけではないが、後期ルーンへの移行は、かつてO・フォン・フリーゼンが論じたようにスカンディナヴィア世界がヨーロッパから

孤立していたからではなく、それどころか外部世界との接触が頻繁となり文化的な跳躍を経験するヴァイキング時代に起こったことを指摘する点にも、コンテキストを重視する著者の基本的態度が表れている。第6章は、第5章で論じられた後期ルーンのノルウェーに残る具体例の検討である。ノルウェーのルーン刻銘はデンマークやスウェーデンに比べると圧倒的に少なく、ルーン石碑に限ってはおよそ50しか伝存していない。しかしながらその中には、スカルド詩人がデンマークで死んだ息子を記念するスタンゲランド石碑、デンマーク王クヌートのイングランド遠征への参加を伝えるガルテランド石碑、東方の遠征先で命を落とした人物を記念するアルスタッド石碑、ノルウェーにキリスト教が伝来したことを宣言するクリ石碑、ある有力者の所有する自有地に教会を建設したことを伝えるオッドネス石碑等、一般史においても注目されるべき興味深い石碑も含まれる。いずれの刻銘についても第4章でエッグヤ石碑に対して試みたのと同様に、旧説の問題点を整理し近年提示された刻銘解釈上の新説を紹介する。こうした新説の多くはノルウェー内でなければアクセスの難しい雑誌上に掲載されたものが多いため、研究者には極めて有益である。また章の途中では、ルーン石碑を単なる死者記念のモニュメントではなく土地財産の継承証言と見なすB・ソーヤーによる見解とルーン石碑の分布傾向という、優れて歴史学的な問題にも関心を寄せている<sup>34</sup>。とりわけ、石碑の分布とキリスト教の導入には何らかの関連があるとする著者の主張は興味深い。

第4部は第7章「盛期中世へ」(131-49頁)と第8章「盛期中世」(150-202頁)からなる。ここは著者の専門でもあり、また校訂版がまだ出揃っていない中世ルーンの説明であるため貴重である。第7章では、拡張期であったヴァイキング時代が終焉を迎えラテン・カトリック世界の中に組み込まれつつあるノルウェー社会におけるルーン刻銘をいくつか取り上げる。この時期、ヴァイキング時代に隆盛を誇った記念石碑の建立は次第に退潮し、刻銘にも神や聖母に魂の救済を訴えるなどキリスト教的心性に基づいた表現が増加する。また、土地の境界について宣言するフーセビー石碑や「イエルサレムへ向かう者たち Jórslafarar」

の立ち寄りを告げるオークニー・メーズハウ墳墓内の刻銘も紹介する。最終章である第8章では、後期ルーンに「点 dot」を添えることで音と表記の一対一対応を図ったことを特徴とする中世ルーンの紹介であり、盛期中世の教会等に残される刻銘に加え、ベルゲンやオスロで発掘された木簡に記されたルーン刻銘を取り上げる。他書で紹介されることは少ないが、テレマークのヴィニエ教会に残されているスヴェッリ王時代の内戦にかかわった在地有力者の刻銘は、通常の文献史料以外からも政治史への寄与が可能であるという点で興味深い史料である。本章の後半で取り上げられる木簡群の刻銘は、古ノルド語のみならずラテン語をルーンに転写したものもある。内容も、商業上のやり取りを記録する書簡、飲み屋通いを白状する落書き、他人の妻に対する愛の告白、場合によっては露骨に特定個人との性的関係を吐露するものまである。断片的ながらも中世人の生活を浮かび上がらせる貴重な資料であることがわかる。本章の最後では、1500年頃における印刷術の導入と書籍の大量生産がノルウェーにおけるルーン文字の使用を決定的に終了させたことを示唆する。

### 3. コンテキストの中のルーン

以上のような内容を持つ本書は、ノルウェーにおけるルーン刻銘の梗概を知りたいと願う初学者のみならず、現在のルーン学の最新の見解を紹介するという点で当該時代に関心のある研究者にとっては必携書であると言える。最後に本書の内容に対するいくつかの注記を試みたい。

本書最大の特色は、歴史言語学的アプローチを採用しクリアなノルウェー・ルーン展開史を記述している点にある。定評あるルーン刻銘概説——例えばL・ミュッセやK・デューウェルのそれ——は、スカンディナヴィア全体をひとつの文化圏と指定しており、やや乱暴な言い方をすれば歴史過程の異なる地域的枠組みを捨象した上で、ルーン刻銘の変化を跡付けるといった形式をとる。他方、国家別の概説——E・モルトケやS・ヤンソンのそれ——は、対象とする地域固有の歴史的特性に注意は払いながらも、ヴァイキング時代の石碑に過半数の紙幅が割かれており、その前後の時代に関する叙述内容は相対的に薄くならざるをえな

った。それに対し本書は、ローマ期から中世末期までという千年を超えるスパンの中でルーンの表記、音韻、語彙の通時的変化を捉え、その要点を提示している。そして前期ルーンから後期ルーンという大きな流れのみならず、実はそれ以外にも様々な段階でルーンは言語システム上の変化を経験していたことが各所に盛り込まれている。二つ目は、コンテキストの重要性を強調している点である。テキストとコンテキストの相関関係は現在あらゆる学問において認知されているといえるが、その実践はそれほど簡単なことではなく周到な準備を必要とする。ルーンのコンテキストを再構成するための情報は主として考古学や歴史学から取得することになるが、それは必然的に学際研究を前提とする。コンテキストの重要性を前面に押し出す本書は、従来のノルウェー・ルーンに関する研究——例えばM・オルセンやI・サンネス・ヨーンセンのそれ——に比べれば、はるかに他の研究分野に開かれた姿勢をとっており、これからのルーン刻銘の研究に方向性を与えたことになるだろう<sup>35</sup>。三つ目は、本書が大西洋北縁部、つまりイングランド北部、スコットランド、マン島を含むアイリッシュ海周辺、オークニー、アイスランドをノルウェー文化圏の一部と見なし、考察の対象としている点である<sup>36</sup>。よく知られているように、これらの地域はノルウェーを出自とする集団が主として植民した地域であり、当然のことながらノルウェー本土との言語的類似性も指摘される。これら大西洋北縁部からも一定数のルーン刻銘が発見されているが、それらは個別に検討されることが多かった。もちろん、マン島やアイスランドにはノルウェーとは異なる歴史コンテキストが存在するため刻銘の残存状況も特殊であるが<sup>37</sup>、ノルウェー本土との連関という要素を刻銘考察の際に想起することは必要である。

以上のような特色を持つ本書であるが、最後に歴史家が刻銘研究にどのように関わることができるかについて二点注記しておきたい。一つはルーン刻銘と権力の問題、とりわけ紀元千年前後におけるルーン石碑というモニュメントをめぐる権力の問題である。時として高さ数メートルにも達するルーン石碑の建立は在地有力者によるものと考えられるが、その分布には一定の傾向がある。つ

まりノルウェー南西部のロガラン地方からアグデル地方とオスロ湾周辺(メロヴィング期のボッレ、カロリング期の商業地スキリングサール、ヴァイキング期の巨大船葬墓ゴクスタ、チューネ、オーセベリもここに位置する)に集中している。石碑の建立理由に関してはかねてよりB・ソーヤーが土地所有権の誇示という観点から論じており、本書においても彼女の説を受け入れている<sup>38</sup>。しかしながら評者はもう少し踏み込んだ議論も可能と考える。というのも、ノルウェーにおいて石碑が集中している地域は9世紀末から10世紀にかけてノルウェー王権が生成した地域であり、そうであることを勘案するならば、当該地域に石碑を建立した在地有力者は何らかの形で王権の動向にかかわっていた可能性は高いからである<sup>39</sup>。更にもう一点注視すべき事実も付け加えておきたい。実はスカエラック海峡を隔てた先にあるデンマークにおいて石碑がもっとも集中しているのは、ユラン半島北部のリムフィヨルド周辺である。つまり、スカエラック海峡の両岸はそれぞれデンマークとノルウェー双方においてもっとも石碑の集中している地域なのである。現在のナショナルな枠組みからはこぼれ落ちてしまうこの事実が何を意味しているのかは注意深い検討が必要であるが、9世紀以降デンマークの王権がおそらく持続的にスカエラック海峡の対岸に影響を及ぼし続けていたことと無関係ではない、と評者は考えている<sup>40</sup>。王権の影響力の強い地域においてルーン刻銘のあるモニュメントを建立するという行為が、建立者に

とって、それを視る者にとって、権力の行使を望むものにとってどのような意味を持ちうるのか、極めて興味深い問題である。

もう一つは文字システムの問題である。ブリッゲン木簡が発見されることによって、ノルウェーにラテン・カトリック文化とともにローマン・アルファベットが社会各層に浸透した後も、ルーンが使用され続けていたことが確認された。著者は、二つないしそれ以上の言語を併用することは中世社会において珍しいことではないが、異なる文字体系を同時に利用する場というのは極めて稀であるとし、中世ノルウェー社会を「二重文字システム」社会と規定する。確かに興味深い見解であるが、歴史家の関心を惹きつけるのは、「二重文字システム」を採用していた空間において、それぞれの文字システムがどのような場面で利用され、また利用されなかったかという点である。著者は別の論文で、ベルゲンにおいて得られた仮説を中世スカンディナヴィア全体に敷衍し、木簡、墓石、教会建築、教会用具、日用品に刻まれたルーン・アルファベットを分析することで、ローマン・アルファベットとルーン・アルファベットは異なるテキスト共同体を構成しているため、通常は重なり合うことがないとする<sup>41</sup>。著者が対象としているのは中世ノルウェーという場であるが、同様の問題はラテン・アルファベットとルーンの併用が想定される初期中世の大陸やブリテン諸島においても解明されるべきであろう<sup>42</sup>。

## 注

<sup>1</sup> ルーンに関する文献は質を問わなければ無数にある。日本語でまず推奨されるべきは、R・ページ(菅原邦城訳)『ルーン文字』(学藝書林1996)と、谷口幸男『ルーン文字研究序説』(広島大学文学部紀要30特掲号1)(広島1971)。欧語でもっとも基本的な手引は、K. Düwel, *Runenkunde*. 3. Aufl., Stuttgart 2001. 十分な文献目録を備えた簡潔な記述として、K. Düwel, *Runen und Runendenkmäler, Reallexikon der Germanischen Altertumskunde*. 2. Aufl., 25 (2003), S. 499-512.; J. E. Knirk, M. Stoklund, & E. Svärdström, *Runes and runic inscriptions*, P.

Pulsiano ed., *Medieval Scandinavia: An Encyclopedia*. New York 1993, p. 545-55. 古いのが、中世史家による生彩ある手引として、L. Musset, *Introduction à la runologie*. Paris 1965.

<sup>2</sup> アングロサクソン世界では、逆に文字数を増やしながらルーンは生きながらえた。アングロサクソン・ルーン最良の手引書として、R. Page, *An Introduction to English Runes*. 2 ed., Woodbridge 1999, p. 38-48.

<sup>3</sup> スカンディナヴィアのみならずヨーロッパ近世の精神史において奥深い鉱脈であるはずのルーン学研究史については、ほとんど手付かずのままである。さし

- あたり、Düwel, *Runenkunde*, S. 217-24. ; 当該テーマの出発点として、小著ながら豊かな内容を持つのは、G. Jaffe, *Geschichte der Runenforschung. Geistesgeschichtliche Betrachtung der Auffassungen im 16.- 18. Jahrhundert*. Berlin 1937.
- <sup>4</sup> スウェーデン王グスタフ・アドルフの私教師にして国家古物調査官であったブルーレは、『ルーン一覽 Runtavlan』(1599)を著し、そこに19のルーン刻銘を掲載するとともに、ルーンに関する諸知識を整理した。L. Wollin, *Drömmen om Runverket: Johannes Bureus och den äldsta runologin, Blandade runstudier 1* (Runrön 6) . Uppsala 1992, s. 173-201.
- <sup>5</sup> コペンハーゲンで医師職に従事していたヴォルムは、『ルーン、或いはデンマーク最古の文学 *Runer seu Danica literatura antiquissima*』(1636 2ed.1651)でルーンの起源を論じ、『デンマーク人のモニュメント六書 *Danicorum monumentorum libri sex*』(1643)ではデンマーク(現在スウェーデン領であるスカンディナヴィア半島南部も含む)、ノルウェー、ゴットランド島にある144のルーン刻銘を翻刻した。K. Randsborg, *Ole Worm: An essay on the modernization of Antiquity, Acta Archaeologica 65* (1994), p.135-69, esp.136-39.
- <sup>6</sup> 近世ヨーロッパにおける言語起源論争に関しては膨大な研究史があるが、さしあたり、U・エーコ(上村忠男・廣石正和訳)『完全言語の探求』(平凡社1995), 117-75頁。
- <sup>7</sup> ゴート・ルネサンスに関しては、K. Johannesson, *The Renaissance of the Goths in Sixteenth-Century Sweden*. Berkley 1991. ; J. Nordström, *De yverbornes ö*. Stockholm 1934.
- <sup>8</sup> この興味深い人物に関する近年の研究として、G. Eriksson, *Rudbeck 1630-1702: Liv, lärdom, dröm i barockens Sverige*. Stockholm 2002. ルドベックの弟子にあたるJ・ヨーランソン(Johan Göransson 1712-69)は、『パウティル *Bautil*』(1750)において1173のルーン石碑を集成し、その序文において「スウェーデン語はラテン語の母」と主張する。K. Düwel, *Runenkunde*, S. 219.
- <sup>9</sup> グリムは「ドイツのルーンに関して Ueber deutsche Runen」(1821)と題する講演で、ドイツでは当時なお未発見であったルーン刻銘がいずれ発見されるであろうと推測している。Düwel, *Runenkunde*, S. 220. グリム兄弟とスカンディナヴィア古世界との関係を論じる興味深い論文として、C. L. Gottzmann, *Die altnordischen Studien und Publikationen von Wilhelm und Jacob Grimm zur Literatur, Sprache, Ur- und Frühgeschichte, Rechtsgeschichte, Geschichte und Runologie, Brüder Grimm Gedenken 7* (1987), S. 63-88.
- <sup>10</sup> ランケに至るまでの編年法を論じているのは、岡崎勝世『キリスト教的世界史から科学的世界史へ ドイツ啓蒙主義的歴史学研究』(勁草書房 2000)。比較言語学の歩みは、風間喜代三『言語学の誕生 比較言語学小史』(岩波書店 1979)。なお、ルーン刻銘の研究がラテン刻銘の研究とどのような関係にあるのかは十分に論じられているとはいえない。通常「中世刻銘学 *Medieval epigraphy*」といえば、暗黙のうちにラテン刻銘学を指すからである。例えば、R. Favreau, *Épigraphie médiévale (L'Atelier du médiéviste 5)*. Turnhout 1997. ; 岡崎教「刻銘学」高山博・池上俊一編『西洋中世学入門』(東京大学出版会 2005), 73-80頁。
- <sup>11</sup> 本書は当初デンマーク語で出版されたが、学界に深甚な影響を与えたのは著者自身によって内容の補訂されたドイツ語版であった。L. F. A. Wimmer, *Die Runenschrift*. Berlin 1887.
- <sup>12</sup> L. F. A. Wimmer, *De danske Runemindesmærker*. 4 vols., København 1893-1907. この校訂版にはM. Petersen による美しい図版が併載されているため、現在も利用される。縮約版として、L・ヤコブセンによる、L. F. A. Wimmer, *De danske Runemindesmærker: Haandudgave ved Lis Jacobsen*. København 1914. しかしながら最新の校訂版は、E. Moltke & L. Jacobsen, *Danmarks Runeinskrifter*. 2 vols., København 1941-42. なおデンマークでは、第三の校訂版が準備されつつある (<http://www.danskeruner.dk/>).
- <sup>13</sup> 歴史学者P・A・ムンク(Peter A. Munk 1810-63)やR・ケイサー(Rudolf Keyser 1803-64)のもとで文献学を修めたブグゲは、コペンハーゲンとベルリンへ留学した後、1864年にオスロ大学の比較言語学並びに古ノルド語学講師となり、66年には教授の地位を獲得した。20世紀前半のノルウェーを代表する中世学者A・ブグゲ(Alexander Bugge 1870-1929)は、彼の息子である。
- <sup>14</sup> S. Bugge & M. Olsen, *Norges Indskrifter med de ældre Runer*. 3 vols., Christiania 1905-24.
- <sup>15</sup> M. Olsen & A. Liestøl, *Norges Innskrifter med de yngre Runer*. 5 vols., Oslo 1941-60. ヴァイキング時代以降の後期ルーン刻銘を集成したこのシリーズは、デンマークやスウェーデンの校訂版と同様に、一つ一つの刻銘に番号を振り、現物の写真(すでに失われたものに関しては近世の刊本に残るスケッチ)、各刻銘に関する研究史、校訂、解釈を掲載している。第3巻以降はオルセンの弟子であったA・

- リーストル (Aslak Liestøl) を共編者に迎え、1960年に一旦シリーズを終了した。
- <sup>16</sup> O. Olsen, *De norrøne Runeinnskrifter*, O. von Friesen ed., *Rumorna* (Nordisk Kultur VI) . Stockholm-Oslo-København 1933, s. 83-113.
- <sup>17</sup> M. Olsen, *Runic Inscriptions in Great Britain, Ireland and The Isle of Man*, H. Shetelig ed., *Civilisation of the Viking settlers in relation to their old and new countries* (Viking Antiquities in Great Britain and Ireland 6) . Oslo 1954, p. 151-233.
- <sup>18</sup> ウィンドランダに関しては、南川高志『海のかなたのローマ帝国 古代ローマ帝国とブリテン島』(岩波書店 2003)。ノヴゴロドに関しては、V・L・ヤーニン(松木栄三・三浦清美訳)『白樺の手紙を送りました ロシア中世都市の歴史と日常生活』(山川出版社 2001)。
- <sup>19</sup> 現在、A. Liestølによる6-1(1980)と、I. Sannes Johnsenによる6-2(1990)の二冊のみにとどまる。マテリアルそのものは文化博物館のRunarkivetに整理保管されており、ウェブ上にデータベースも公開されている(<http://www.nb.no/baser/runer/index.html>)。リーストルによる中間報告は、A. Liestøl, *Runer på Bryggen, Viking* 27 (1963), s. 5-53.; 研究報告集として、*Bryggen Papers*. Oslo 1985-.; 商業関係テキストを分析した、I. Sannes Johnsen, *Die Runeninschriften über Handel und Verkehr aus Bergen (Norwegen)*, K. Düwel et alii hrsg., *Untersuchungen zu Handel und Verkehr der vor- und frühgeschichtlichen Zeit in Mittel- und Nordeuropa IV. Der Handel der Karolinger- und Wikingerzeit*. Göttingen 1989, S. 716-44.
- <sup>20</sup> テンスベリで発見された中世ルーンに関して、K. Gosling, *The runic material from Tønsberg, Universitetes Oldsakssamling Årbok* 1986-8 (1989), s. 175-87.
- <sup>21</sup> C. W. Thompson ed., *Proceedings of the First International Symposium on Runes and Runic Inscriptions* (Michigan Germanic Studies 7-1) . Ann Arbor 1981.
- <sup>22</sup> これまでストックホルム(1985)、ノルウェーのグリンダハイム(1990)、ゲッティンゲン(1995)、イエリング(2000)、ランカスタ(2005)で開催され、2010年はオランダで予定されている。いずれも報告集が公刊されているが、中でもゲッティンゲンのそれは質量ともに群を抜いている。K. Düwel hrsg., *Runeninschriften als Quellen interdisziplinärer Forschung* (Ergänzungsbände RGA 15) . Berlin - New York 1998.
- <sup>23</sup> Runrön: *Runologiska bidrag utgivna av Institutionen för nordiska språk vid Uppsala universitet*, red. L. Elmevik & L. Petersen (<http://www.nordiska.uu.se/skrifter/runron.htm>) .
- <sup>24</sup> Samnordisk Runtexdatabas (<http://www.nordiska.uu.se/forskning/samnord.htm>) . ルーンのデータベース化は、いくつかの大学で進行中である。たとえば前期ルーンに関するRuneprojekt Kiel (<http://www.runeprojekt.uni-kiel.de/>)、アングロサクソンとフリースラントのルーンに関するOld English Runes Project (<http://www1.ku-eichstaett.de/SLF/EnglVg|SW/AeRunen.htm>)、後期ルーンに関するAn English Dictionary of Runic Inscriptions in the Younger Futhark (<http://runicdictionary.nottingham.ac.uk/>)である。
- <sup>25</sup> 博士論文のタイトルは、「ベルゲン・ブリッゲン出土資料群の表音文字的分析 fonografimatsk analyse av runematerialet fra Bryggen i Bergen」。
- <sup>26</sup> ノルウェー語版のタイトルは「最初にフサルクありき I begynnelsen var fupark」であり、文献紹介が英語版に比べやや詳しい。
- <sup>27</sup> E. Moltke, *Runes and their Origin. Denmark and Elsewhere*. København 1985.
- <sup>28</sup> S. B. F. Jansson, *Runes in Sweden*. Stockholm 1987.
- <sup>29</sup> ここで挙げられているルーン生成地は、1. 東ヨーロッパ、2. スイス南部からイタリア北部にかけてのアルプス周辺、3. デンマーク・ユラン半島南部の三つである。いずれの論においてもローマン・アルファベットの影響は考慮されている。伝承する刻銘の数は3に最も多く、そのためE・モルトケはデンマーク説を採用する。E. Moltke, *Runes and their Origin*, p. 61-65.; ルーンの起源論争史を紹介しているのは、Düwel, *Runenkunde*, S. 175-81.
- <sup>30</sup> もちろんローマ世界とスカンディナヴィア世界との接触はかねてから理解されてきたことである。F. Askeberg, *Norden och kontinenten i gammal tid*. Uppsala 1944, s. 38-94.
- <sup>31</sup> ルーンの魔術的要素に関する学術著作として、S. Flowers, *Runes and Magic. Magical Formulaic Elements in the Older Runic Tradition*. New York 1986.; A. Bæksted, *Målruner og Trolldruner. Runemagiske studier*. København 1952.
- <sup>32</sup> 近年、前期ルーンに関する注目すべきモノグラフが次々と公刊されている。S. Fischer, *Roman Imperialism and Runic Literacy: The Westernization of Northern Europe (150 - 800 AD)* (Aun 33) . Uppsala 2005.; T. Looijenga, *Texts and Contexts of*



*the Oldest Runic Inscriptions* (Northern World 4). Leiden 2003.; T. Birkmann, *Von Ågedal bis Malt: Die skandinavischen Runeninschriften vom Ende des 5. bis Ende des 9. Jahrhunderts* (Ergänzungsbände RGA 12). Berlin - New York 1995.

- <sup>33</sup> O. Grønvik, *Runene på Eggjasteinen: En hedensk gravskift fra slutten av 600-tallet*. Oslo 1985. また、*Arkiv för nordisk filologi* 103 (1988), 115 (2000), 117 (2002) にも、著作以降のエッキヤ石碑を巡る議論を公表している。
- <sup>34</sup> スカンディナヴィア全体にわたる石碑の分布傾向に関する基礎的作業は、R. Palm, *Runor och regionalitet: Studier av variation i de nordiska minneskrifterna* (Runrön 7). Uppsala 1992.
- <sup>35</sup> ノルウェー・ルーンに関する単著は多くない。ノルウェーとスウェーデンのルーンに共通する要素を検討したのは、I. Sannes Johnsen, *Stuttruner i vikingtidens innskrifter*. Oslo 1968. ; 各ルーンに簡単な解説を付したのは、G. Høst, *Runer: Våre eldste norske runeinnskrifter*. Oslo 1976.
- <sup>36</sup> これらの地域に関しては、オルセン以降重要な研究が現れた。K. Holman, *Scandinavian Runic Inscriptions in the British Isles: Their Historical Context*. Trondheim 1996. ; R. Page., *Runes and Runic Inscriptions*. Woodbridge 1995. また、新しい校訂版の出版も進んでいる。M. Barnes ed., *The Runic Inscriptions of Maeshowe, Orkney* (Runrön 8). Uppsala 1994. ; M. Barnes, J. Ragner Hagland & R. I. Page eds., *The Runic Inscriptions of Viking Age Dublin* (Medieval Dublin Excavations 1962-81 Series B-5). Dublin 1997. 近日中に、M. Barnes と

R. I. Page によるイングランドとスコットランドの校訂版も出版される予定である。

- <sup>37</sup> アイスランドに伝来しているのは中世ルーンのみであり、中世アイスランドと深いつながりを持つベルゲンのブリッゲン木簡群と連携させた研究が待たれる。アイスランドの刻銘一覧は、A. Bæksted, *Islands Runeindskrifter* (Bibliotheca Arnarnæana 2). København 1942.
- <sup>38</sup> B. Sawyer, *The Viking Age Stones: Custom and Commemoration in Early Medieval Scandinavia*. Oxford 2000.
- <sup>39</sup> C. Krag, The early unification of Norway, K. Helle ed., *The Cambridge History of Scandinavia I: Prehistory to 1520*. Cambridge 2003, p. 184-201.
- <sup>40</sup> ヴァイキング時代におけるスカエラック海峡をめぐる政治構造に関しては別稿を予定している。
- <sup>41</sup> T. Spurkland, Literacy and 'runacy' in Medieval Sandinavia, J. Adams & K. Holman eds., *Scandinavia and Europe 800-1350: Contact, Conflict, and Coexistence*. Turnhout 2004, p. 333-44.
- <sup>42</sup> この問題に関しては研究集会が 1992 年に開催され、貴重な報告集が公刊されている。K. Düwel hrsg., *Runische Schriftkultur in kontinental-skandinavischer und -angelsächsischer Wechselbeziehung: Internationales Symposium in der Werner-Reimers-Stiftung vom 24.-27. Juni 1992 in Bad Homburg* (Ergänzungsbände RGA 10). Berlin-New York 1994.
- 本稿は、2005 年度松下国際財団の助成による成果発表の一部である。